
軽音部です！

大平光太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軽音部です！

【Nコード】

N8725Z

【作者名】

大平光太郎

【あらすじ】

主人公宮田優斗の父は、昔からバンドを組んでいて小学3年生から主人公宮田優斗は、ギターを始めて高校生になり軽音部と言う部を作りその部員とプロを目指すという日常ストーリー

(1) 入学初日(前書き)

こんにちはわ！大平光太郎です！小説は、まあまあ読むのですが小説を書くのは、初めてです。だからあまり自信ありませんので(^^;)

(1) 入学初日

俺の名前は、宮田優斗小学3年生からギターをやっているのだけどバンドは、組んでいないその理由は、高校生になったら軽音楽部と言う部に入るためだそして今は、高校の入学初日クラスを確認して今教室に向かうところだった。

「お〜い優斗〜」と後ろから永田純平と言う名前の幼稚園の頃からの友達が追いかけて来た。

「お〜純平おはよ〜」と俺が言う。

「おはよう〜！」と純平。

あ、ちょうどいいや一応純平のクラスどこか聞いておこう。

「あ、そうだ！俺2組なんだけど純平何組？」と聞いて見た。

そしたら純平が

「フッフッフ秘密だ！」…ム力つくな…

「じゃ〜いいや〜んじゃバイバイ〜」と純平をおいてクラスに向かうとしたら純平が慌てて

「あ〜！お、お俺も2組だよ！！置いて行かないで」と追いかけて来た。

そしていつしよに2組に向かった。

この高校は、元女子高で3年前から共学になったらしいだから女の子は、男子と比べて…多いな…。

2組のクラスに入ると先にいた生徒達がこつちをじーつと見てくる…視線が…すると純平が。

「え〜っと！お、お、俺！な、永、永田、じゅ、純、ぺ、平と、と」と緊張で自分の名前が言えない

純平…落ち着けよ…しょうがないな…。

「こいつは、永田純平でいって緊張したらこんな風になっちゃうんでま〜仲良くしてやって」と俺。

で俺と純平は、適当に席に付いた。

まゝいろいろ省略してクラスで自己紹介見たいのがあった。
まずは、男子からだった。

純平は、さっきと同じで緊張で何も言えなかった。
そして俺の番が回ってきた。

頑張れ〜！俺〜！！！！最初が大事だぞ最初が！！。

「え〜っと俺の名前は、宮田優斗と言います得意な科目は、音楽と
国語ですこれからよろしく！」

言えた〜！！おっしや〜！！言えたぞ！！

「よろしくね！宮田君！」と隣の席の女の子が俺に言った。

格好は、茶髪で髪は、長くてやたら整った顔立ち簡単に言ったら美
少女だった。

「よ、よろしく！え〜っと…」と俺は、慌てて言った。

「松本唯だよ」と微笑んだ。

「よろしく松本さん」…可愛いな…
その後休み時間だった。

後は、休み時間が終わったらホームルームで帰れるぞ！！そう思っ
ていると

「あの…宮田君」と隣の松本さんが俺に話を掛けてきた。

「ん？何？」と俺。

「宮田君って中学の時陸上部だった？」と聞いてきた。

ん？俺は、中学の頃陸上部だったけど…なぜそんな事をきくんだ？。

「ん？陸上部だったよ…って何でそんな質問なの？」と俺は、聞い
て見た。

「ん？あゝ中3の時友達と一緒に中学陸上大会見に行つてて宮田君
に似た人いたいたな〜と思って」。

と松本さんが言った。

「よく選手の顔見てるんだね」と俺が言った。

「やっぱ宮田君だったんだ〜賞状もって優勝した〜って叫びながら
走ってた人〜」笑いながら言った。

…あれか！！！！いや…始めて100m走で優勝してうれし

かつたんだもん!!…てか恥ずかしい!。

「あ、あれ見てたんだ…いや、始めて優勝したからさ…つい…。」
と俺。

…やべ…恥ずかしい…。

「そっか、優勝か、嬉しかった?」と聞いてきた。

「うん嬉しかったよ」と俺は、微笑んだ。

と話してる内に休み時間は、終わった。

(1) 入学初日(後書き)

いや〜この軽音部です!の入学初日を読んで下さった方々まことに
ありがとうございます!!。

(2) 軽音部制作(前書き)

さ〜軽音部です！2話目が始まりましたよ〜

(2) 軽音部制作

入学式の次の日の朝起きたら純平がいた。

「んん！んん！何でお前いんの！！こんな朝早くに！！」と俺が言う。

「ん？あゝ早く起きすぎちゃってよゝんで暇だったから俺は、考えた！！」。

「そしてお前の部屋の窓から入ってきた！！」と胸をはって純平は、言った。

「何でそうなんだよ！！あゝもいいや！！面倒くさい」と真面目に面倒くさいので話すのをやめた。

そして1階に下りて朝飯を食べて歯をみがいて制服に着替えた。

そして学校に向かった1週間は、小学や中学と同じで学校が終わる時間が早いらしい。

今日から部活に入部が出来る！！つまり！！軽音部に入部！！6年間どれだけ待った事か・・・。

先輩達うまいんだろうなゝ楽しみだなゝ。

そして学校で部活動紹介が始まった。

軽音部 軽音部

と、どんどん部活の紹介が終わっていつて最後には、軽音部は、出なかつた・・・。

「・・・」「軽音部・・・出て無いぞ？何でだ？」と俺が言うと。

隣の生徒が。

「軽音部？そんな部ないと思うよ？この学校にわ」と言う。

「・・・え・・・うそ！！！！」。

その後教室で俺は、軽音部が無くて元気が出なかつた。

その様子に気づいた松本さんが。

「どうしたの？まるで一万円を拾ったと思ったたらおもちゃのお金だった時の人見たいだよ」と松本さん

「・・・どんな時だよ・・・まじいいや。」

「いや・・・この学校俺が入りたい部あるかと思ってたんだけど・・・なかったからさ・・・」と俺は、言う。

「へーそうなんだ〜でもさ！！高校からは、部活とか作れるんじゃないの？」と言う松本さん。

「・・・え？そんな事出来るの？」と目を丸くして俺は、言った。

「うんできるよ担任の先生に聞いて見たら？」と言う。

「・・・担任の先生の名前なんだっけ？」と俺は、松本さんに聞いた。

「忘れたの？竹内奈々子先生だよ」と教えてくれた。

「おお！！思い出した！！思い出した！！んじゃ聞いてくるね」と職員室にむかつて行った。

「竹内先生！！部活作りたいんですけど！！出来ますか？」と元氣よく聞いた。

「出来ますけど・・・何部を作りたいの？」と尋ねる。

「軽音部です！！」と俺。

「そうですね〜軽音部〜では、部員を宮田君を合わせ4名集めて来てくださいそれから顧問は、私が他の先生に聞いて回りますので」と先生が言った。

「え？いいんですか？なぜ軽音部を作ろうと思ったのかとかいろいろ聞かないんですか？」と俺が尋ねる

「はい、もともとは、軽音部と言う部活も2年前までは、ありましたし」と先生が言った。

「そうですねですか！！じゃ〜後3名集めれるようにがんばります！！」と俺

俺は、軽音部を作るために後3人集めてみせると決めた！！

(2) 軽音部制作(後書き)

軽音部です！話目を見てくれた方々ありがとうございます。
次の話も見てくださいるとかなり嬉しいです！。

(3) 部員募集! (前書き)

こんばんわ!!! 大平光太郎です! 軽音部です! 3話目も読んでね!

(3) 部員募集!

絶対に部員3人集めると俺は、決めた。

「はいこれ」

先生に3枚ほど白い紙をいきなり渡された。

「これで部員募集の紙を作りなさい」

「コピーは、何回でもしてあげるからがんばってね!!」と先生が言った。

「あ、あと明日から楽器を持ってきて良いからね」

「はい!!」と一応元気よく返事をして職員室を出た。

そして教室まで走って松本さんに「部活OKって!!」と笑いながら言った。

「おっ!よかつたじゃん!!」

「ところで何部を作りたいの?」と松本さん。

「え?あゝ軽音部だよ」と俺。

「軽音部?あゝバンドとかする部のことか?」

「宮田君ギターとかドラムとか出来るの?」と聞いてきた。

「ん?出来るよ小3から俺ギターやってたし」と真顔で言った。

「へゝすごいな」と笑ってこっちを見る。

「あのさ・・・松本さんって絵とかうまい?」と聞いて見る俺。

「え?なんで?」と言う

「いや・・・部員募集の紙に絵とか書いたほうがいいかな?と思っ
て」

「書けない?」と俺。

頼む書けるよって言うてくれ!!

「よおゝ何話てんの」と純平が来た。

「ん?あゝ軽音部の部員募集の紙の話をしてたんだよ」と俺が純平
の方を向いて言った。

「そうそう部員募集の紙に絵かいてくれないかって」

「私は、いいよ」と松本さん。

「俺も書いてやるぜい〜絵なら俺中学の時賞状取ってたし!〜」と自慢げに純平は、言った。

「じゃ〜こうしようよ3人で絵を描く」と俺と純平を見て言った。

「んじゃ〜そうしようか」

「んじゃ〜はいあと色ペンあ、ギターとか描ける?」と俺

「描けるよ〜お姉さんに任せときなさい!〜」となんか嬉しそうに言う。

5分後「きたよ!」「できたぞい!」と同時に言う。

速いな・・

「おお〜そっかま〜俺も一応できてるしせーので見せあいつこしよ
うよ!〜!」

「うん!」「おうよ!」とまたも同時に言う

「せーの」

と俺は、びっくりした純平の絵は、かなりうまくて見た感じ教室に置かれたギター見たく描いたようだ。

松本さんは、 がいっぱいあってギターが描かれているどっちもうまくかった。

そして俺は、ギターとマイクを描いた絵だった・・・俺のは、絵が下手だった。

「おお!〜うまいな!〜2人とも!〜!」とマジでびっくりしながら俺は、言う。

「んじゃ〜この3枚コピーしてくるね〜」と俺は、席を立て言う。

「いつてらっしや〜い」「いつてこい!〜!」2人が言う。
そして職員室に行った。

「先生!〜できました!〜!」と元気よく言う。

「もうできたの?速いのね〜」

「じゃ〜一応6枚ずつコピーするから」と言う。

「はい!お願いします!〜!」とお願いする。

少しして。

「はいどうぞ部員集め頑張ってね〜！」と18枚の紙を渡された。

「ありがとうございます！部員集め頑張ります〜！」
と教室に戻ってちょうどチャイムが鳴り。

次の授業が始まりそして授業が終わって。

「すまないんだけど…純平…このプリントいろんな所に貼るの手伝
つてくれない？」

「1年生の廊下だけで良いからさ」とお願いする。

「おお〜いいぞ〜」と引き受けてくれた。

そして9枚純平に渡して俺と純平は、バラバラに別れてプリントを
張った。

俺は、1年生下駄箱と男子トイレの近くに張ったあと音楽室。

純平は、1年廊下と部員募集の掲示板に張ったらしい。

そしてブラブラして家に帰った。

(3) 部員募集！(後書き)

読んでくださりましたか？読んでくださったのならあざっす！！
次の話も読んでくださいね。次からは、軽音部がいよいよ結成しま
す！！

(4) 軽音部結成！(前書き)

こんばんわ大平光太郎です！いよいよ軽音部が結成しますよ〜しち
やいますよ〜

(4) 軽音部結成!

俺は、朝の5時27分に自然と起きてしまった。

自分がセツトした目覚まし時計よりかなり早く起きてしまいすこしイラ付いた。

俺は、しょうがなく1階に下りてキッチン冷蔵庫をのぞくと晩飯の残りがあった。

「これを朝飯にするか…母さんまだ起きて無いししょうがないよな・・・」

と俺は、独り言を言う。

そして冷蔵庫から出してレンジでチンした。

晩飯の残りを食べ終わってちょうど母さんがキッチンに来た。

「あら、優斗私より早く起きるなんて珍しいわね?」

「ま〜ね・・・たまたまだよたまたま・・・」

食器を片付けながら俺は、言った。

そして歯をみがいて制服に着替えて純平がくる時間までまった。

その間する事がないからギターを弾くことにした。

自分のギターは、10本あるからその中で一番気に入っているギターを選んだ。

そして俺が好きなバンドで一番気に入ってる曲を弾いた。

俺は、次から次へ、と好きな曲を弾いた。

「さすが優斗うまいな」

いつの間にか兄貴が俺の勉強机の椅子に座ってた。

「今度久しぶりに俺のドラムと合わせないか?」

と兄貴が誘ってきた。

「ん?ま〜良いけど」

と俺は、一応OKした

「んじゃ〜決まりな」

「おっとこんな時間か〜んじゃ仕事言ってくるな!」

と兄貴は、部屋を出た。
後から純平が来た。

「おう！おはよう！」

「おはよう」

と俺は、返す。

「今日からギター持っていけるんだっけなどれにしよう」

と俺は、ギターを選んだ。

「たしか音がいいやつこれだっけ？俺には、わかんないけど」

「これにしたらどうだ？」

と純平が言ってくれた。

そのギターは、レスポールギターと言う種類でかなりいい音が出る。
色は、赤いような感じで木の色も混ざっている

「これ値段何ぼだっけ？」

と純平が聞いてきた。

「ん？確か13万7千900円」

と的確に値段を言った。

「お前のギターすごい多いよな・・・」

と純平は、言う

「まゝそれ中古だがな」

と俺は、いった。

「新品だったらもっと高いじゃん・・・中古で充分だよ！」

と話しながら俺は、ギターをケースに入れて自分の持っているアン
プの中で一番小さいのを持って家を出た。

教室に行くときクラスの仲間が

「宮田ギター持ってどうしたの!？」

とクラスの男子が俺に話しかけてきた。

「ん？あゝ俺軽音部作るうとしてるから奈々子先生に許可とって持
ってきた」

と俺は、ギターを教室の隅に置きながら言った。

「そ、そうなんだ・・・弾けるの？」

と聞いてくるクラスメート。

「ん？まゝなひけるぞ！」

と俺は、言った

「おおゝなんか弾いて見てよ！！」

と言ってくる。

面倒くさいな・・・

「いいよ」

と俺は、クラスメートがすげ〜と言つような曲を弾いた

「宮田・・・すげんだなお前つて！！」

といろんな人が俺に言った

フツ予想道理だ！！と俺は、心の中で喜んでいたら

いきなり放送が流れ出した

「宮田優斗君いたら職員室にくるように」

と言つ放送だった。

今の演奏しちやいけなかったのか？ばれたのか？まゝ行って見よう。

ギターが心配なので純平にギターを渡して俺は。

「絶対に触らせんじゃね〜ぞ！！」

と言つて俺は、職員室に言った。

「宮田君！軽音部の顧問OKしてくれた先生がいるんです。」

「え、本当ですか！？」

「まゝ予定ですけどね」

と先生は、言つ。

「志熊先生〜」

「はい」

と黒髪で美人な先生がきた

「この人が軽音部の顧問OKして下さいたんですよ」

「おはようございます」

と俺に挨拶をしてきた。

俺も挨拶をした。

そしていろいろあつて

休み時間になった。

そしてなんとなく俺は、静かにギターを弾きたくなって音楽室に行った。

俺がギターを弾き始めようとしたら。

「あの〜軽音部の人いますか？」

と声がして俺は、振り向いた

そいつは、ネクタイの色から見て赤だから俺と同じ1年生だった格好は、茶髪で少し髪が長くてツンツン頭上着は、前回にあげている。

「あ、はい軽音部ですと言うより作ろうとしている人間です」

「入部希望のかた？」

と俺は、聞く

「あ、はい！部員募集の掲示板で初心者でも大歓迎と書いてあったので来ました」

「あ、名前は、佐藤亮太郎っていいいます！！」
と言った。

「おおそっか佐藤君か〜本当に入ってくれるの？」
と俺。

「はい！あ、さっき音楽室の前で何か2人ほどたっていましたたよあれも軽音部の部員さんですか？」

と尋ねてくる

「え？まだ部員は、俺と佐藤君だけだよ外に誰かいるの？」

「はい」

と佐藤が言うから俺は、音楽室の外を除くと

「ぬおおー！！」

とびっくりしたような声おだして1年男子が2人いた

「あ、あの・・・入部した員ですけど・・・」

ほぼ同時で言う

「え、マジでー！！」

と俺は、びっくりした。

「あ、はい」とまたもや同時に言う

「あ、僕は、福田悠と言います」「僕は、中谷功と言います」

「おお、福田君に中谷君か、あ、じゃ、佐藤君！！」

「はい」と俺は、佐藤を呼んだ。

「早速職員室行こう！！」と佐藤と福田と中谷を職員室に連れて行った。

そして軽音部が結成した。

(4) 軽音部結成！(後書き)

読んでくれましたか？やっと4話目で軽音部が結成しました！
)

次の話も読んでくださいね！

(5) 楽器を買う(前書き)

部員紹介部長宮田優斗1 - 2格好は、黒い髪で2ブロック制服の時は、ピシットした格好

専門楽器ギターだが一応ドラムもできる

副部長佐藤亮太郎1 - 3格好は、茶髪で少し髪が長くツンツン頭制服の時は、上着を全開に開けている専門楽器謎

部員1福田悠1 - 1格好は、黒髪でテンパポイ制服の時は、ピシットした格好専門楽器謎

部員2中谷功1 - 1格好は、茶髪に少し黒髪が混ざってふわっとした髪型制服の時は、上着を着ていない専門楽器謎

(5) 楽器を買う

今日軽音部ができた！

そして今音楽室にいる。

何をしているかと言うと自己紹介しあっている。

「俺の名前は、宮田優斗1-2な」

「俺の事は、優斗と呼んでくれ」

「じゃ〜次俺」

「俺の名前は、佐藤亮太郎1-3すわ〜」

「じゃ〜俺は、亮太郎で良いよ」

「俺の名前は、福田悠1-1だ」

「俺は、悠で良いぞ」

「おいらの名前は、中谷功だ！悠と同じで1-1だよ」

「じゃ〜功で」「んじゃ〜紹介終わり〜これからよろしくな！」

と自己紹介を終えた。

「で、皆やりたい楽器とかある？」

と俺は、聞いて見た。

「俺ギター」

「優斗確かギター弾けるんだよね！？ツインギターしようぜ〜」

と亮太郎が言う。

「俺は、いいけど・・・何で弾けるの知ってるの？」

と一応聞く。

「いや〜自分のギターそこにあるじゃん！！それと朝優斗が弾いてるの見てたし」

「あ！あれって優斗だったんだ〜いや〜すごかったな俺と功も一緒に見てたけど顔見えなくて・・・」

と言う亮太郎と悠。

「あ、話が少し脱線した」

「俺ベースな中2の冬からやってるし」

と悠が言った。

「じゃ〜俺ドラムで良いや・・・」

「ドラムセットっていくらくらいする？」

と値段を聞いてきた。

「確か7万円位するよ」

と俺は、うる覚えだが値段を言った。

「この前楽器屋でそんなぐらいの値段のを見かけたのし」

「え！？まじで案外安いな・・・」

「お小遣い一応ずつとためてたから7万3千あるな・・・買えるな・・・」

「

と言う功。

「一応聞こうこの中で初心者いるか？」

「はい」「はい」

と亮太郎と功が手を上げた。

「じゃ〜この中で自分の楽器がある人」

「はい」

と悠が手を上げる

「俺と悠が経験者+楽器を持っているのか・・・」

「亮太郎小遣い何円もってる？」

と亮太郎に聞く。

「あ、俺？俺一応・・・お年玉使ってないから8万何ぼかある」

案外持つてんなこいつ

「じゃ〜さ明日土曜日だしさ皆で楽器見に行かない？」

と悠が言う。

「それが良いな俺もちょうど弦買わなくちゃいけなかったし」

そうすると。

「俺も未だに初心者用ベースセットのベースだったしい加減ちや

んとしたのがほしかつたしちやうどいいな！」

と言う。

初心者用セット・・・確かあれ1万7千くらいだったよな・・・俺

初めてのギター7万位するやつだったな……。

「んじやく部長である優斗が明日の場所と時間きめてよ」と言う功。

「んじやく明日駅前朝の9時な」

「え？場所的には、OKだけど……なぜ朝？」

と亮太郎が疑問に思ったらしく質問して来た。

「いや……色んな楽器店周るから」

「それと中古でもかなりいい音が出る楽器もよくあるし」

「かなり値段落としてくれる店も知ってるし」

と俺は、答えた

「あくだからか」

と部員一同が言った。

一応する事が無かったからケータイのアドレスと電話番号を交換し合った。

そして日が暮れてきたので俺らは、帰る事にした。

俺は、晩飯の時に軽音部を作った事を言うことにした。

そして晩飯。

「俺今日軽音部作ったんだけど親父、明日暇？」

と食いながら俺は、言った。

「おゝ作ったのか軽音部！んまゝ暇だけど……どうかしたのか？」

と親父も食いながら言う。

「その部員ベース以外初心者で明日楽器を買いに行くんだけどさゝ車頼めない？」

と俺は、いった。

「おゝいいぞ！でどこに何時集合なんだ？」

と親父は、少しノリノリぽい……。

「明日駅前9時集合」

と俺は、いつて食い終わったので自分の部屋に行った。

そして次の日。

皆を車に乗せて楽器屋を周った。

最初に中古楽器店に行った。

「お、功！ドラムあつたぞ〜！！」

と俺は、功を呼んだ。

「え！？まじで！？」

と急いできた。

そのドラムの色は、真つ赤で状態もよく新品に近かった。

「おお！！これかつこいい！！俺コレにするわ！！」

と一目惚れしたらしくすぐにそのドラムを買った。

そして車まで運んだ。

そして他の2人も楽器を見るのだけどいいのがないらしい。

「んじゃ〜次の店行こうか」

そう言つて次の店に行く。

次の店は、かなり大きくてここは、俺がちっちゃい頃からよく来た店だ。

そして店にはいるとこの店のマスターが「おう！優君と拓さん今日は、何をお探しい？」

「今日は、俺らじゃないよ」

と言つて俺達は、店の奥に行つて親父は、マスターと話をしはじめた。

そしていきなり「おお〜このギターよくな〜！？かつこよくな〜！？」と亮太郎が俺を引っ張る。

そのギターは、ギブソンのSGだった色は白だった

「お〜亮太郎お前ギター見る目あるな！俺も色は、違つが同じの持てるぞ！」

と言つた。

「そつか！色違いか！」

と嬉しがる亮太郎。

「一応いい音出るやつか見てやる」

と俺は、マスターに許可を取つて弾かせてもらった。弾いて見たらこれは、当たり前だった。

「これいい音出るぞ」

と俺は、亮太郎に教えたら即座に買った。

悠もいいベースを見つけたらしい。

ベースの色は、真っ黒だった

そしたら店長が

「おゝ君いいベースを選んだねゝ君みたいな年でそれを選ぶのは、中々いないんだよゝ」

「そんな見る目がある君にこの5千円分の商品券を上げるよ!」

とマスターは、悠に商品券を渡した。

「あざす!」

そして悠もベースを買って俺らは、家に帰った。

(5) 楽器を買う(後書き)

次からは、軽音部での練習が始まります！次のお話も読んでくださいね！

—応言つけどこれ実話じゃないよ—！

(6) 練習！(前書き)

こんばんわ！大平光太郎です！

今日猫を見つけたので触ろうとしたらいかくされました

(6) 練習!

朝寝てたら「ファツカ〜!!!」と俺のケータイの着メロが鳴り響。

俺は、どうせ迷惑メールだと思い無視する、すると。

「ファツカ〜!!!ロロロロロロロロ!!!ファツカ〜!!!」

とずっとなるから何かと思ったら電話だった。

「ん・・・もしし・・・ん・・・こんな・・・朝から・・・誰ですか・・・?」

と俺は、かなり眠たいが電話に出た。

「いや、もう昼前だし・・・あ・・・俺亮太郎だけど・・・」

電話の主は、亮太郎だった。

「今日ギター教えてくれないか?」

と亮太郎は、言った。

「いいぞ・・・ついでだから軽音部全員で練習するか?」

と俺は、眠気を飛ばすためにベットから降りた。

「おお〜それいいな!」

「じゃ〜俺が皆誘うから待ち合わせ場所どこにする?」

とケータイで電話していると。

「お〜優斗やつと起きたか〜」

と兄貴が来た。

「そつだ!今日軽音部の皆で練習するんだけど」

「兄貴のバンドの人たち呼んで皆に教えてやってくれないかな?」

と俺は、兄貴に頼んで見る。

「お、お・・・いいぞ」

と兄貴は、OKしてくれた。

「じゃ〜俺の家に来いよ!」

そう言っつて兄貴は、ケータイを出しながら。

部屋を出た、たぶんバンド人に電話をしようとしているのだろう。

「あ、ごめん、んじやく待ち合わせ場所は、学校の近くのコンビニで！」

と俺は、場所を決めた。

その後昼飯を食ってギターを一応2本持ち兄貴の車に乗って兄貴の家に行った。

そして家にギターを置いて俺は、学校の近くのコンビニへ、走った。兄貴の家は、学校の近くのコンビニの真横にあるからすぐだった。

そしてコンビニにいくと皆がいた。

俺は、皆を兄貴の家に引っ張った。

と家に入ると皆は、びっくりした。

なぜなら家には、ドラムと大きいアンプがいっぱいあるからだ。

部屋は、5個あるのだが、その5部屋中3部屋は、大きいアンプが2個ずつあって残りの2部屋中1部屋は、ドラム1個スピカーは、ずらつとある。

残りの1部屋は、テレビ、コンポ、パソコン、こたつがあるが置いてある普通の部屋だった。

俺は、もう10回以上来てるからもうなれた。

そして後から兄貴のバンドの人たちが来た。

それから兄貴のバンドのギターの人は、今高熱でこれないらしい。

そしてみんな楽器別に部屋に別れた。

俺は、亮太郎に基本から教えてコードを覚えさせた、その次に俺は、楽譜の読み方を教えた。

そして2時間がたった。

「え〜つとこれがAでBでCでEでFでG・・・」

こいつ・・・何か、かなり飲み込みが速くて気持ち悪かった・・・

「すげ〜！お前たぶんギターセンスあるぞ！！！！」

と俺は、びっくりした。

「え！？まじで！？」

と亮太郎が言う。

「よっしゃ！！もっと練習するぞ！！！！」

とまた2時間後

「そろそろ休憩にしようか！」

と俺は、そう言っただ部屋にギタースタンドがあるのでそこにギターを立てた。

そして俺と亮太郎は、普通の部屋で休んでたら悠が以下にも今死にますよ〜と言っ感じの顔をして

部屋から出てきた。

「う・・・パトラッシュ・・・俺・・・疲れたよ・・・」

とフラダースの犬で出てくる男の子のせりふを言う。

「パトラッシュは、いね〜ぞ〜」

と俺は、悠を見ずに言った

それから俺と亮太郎と悠とテレビを見てたら功が汗びっしょりで出てきた。

「う・・・ジョニ〜俺は、俺は、疲れたよ・・・」

と誰のせりふでもないせりふを功が言った。

「・・・だれだよ!!!」

と悠が突っ込んだ!

それから普通の部屋で休んだ後また練習を再開した。

俺は、休憩の間に亮太郎でも弾けるような曲を作っていた。

「亮太郎これ弾けるように練習して」

と俺は、亮太郎に俺が作った曲を練習させた。

そして1時間

「ん・・・難しいな・・・」

と亮太郎が言う

「お〜い、もう8時だぞ〜」

と兄貴が言うので帰る準備をした。

「んじやくこれを弾けるように家でも練習しといて」

と俺は、言っで。

俺達は、家に帰った。

(6) 練習！(後書き)

軽音部です！6話目読んでくださった方々あざっす！！
いや〜最近、私動物にいかくされることが多いから最近悲しんで
います。

(7) 女子新入部員！(前書き)

明けましておめでとうございます！大平光太郎です。
軽音部に今度は、女子が部員として入部しますよー！！

(7) 女子新入部員！

今日は、ちゃんと自分でセットした目覚まし時計で起きた。そして1階に行き朝飯を食べ歯をみがいて制服に着替えた。それから何分かして純平が来たからすぐに学校に言った。

教室の俺の席の隣には、もう松本さんがいた。

「おはよう！松本さん」

「おはよう！宮田君」

と挨拶をしあった。

「宮田君！軽音部の部員そろった？」

と松本さんがいきなり聞いてきた。

「ん？あゝそろったよ！土日は、楽器買ったり練習したりしたし」

と俺は、言った。

「おおゝそろったのゝよかったね！」

と微笑みながら松本さんは、言った。

そして放課後。

俺らは、音楽室で練習していた。

「優斗！昨日帰ってから優斗が作った曲を練習して弾けるようになったぞ！」

「ミス多いけど・・・」

と亮太郎が嬉しそうに言う。

「おお！ミス多くて良いよ！弾けるようになったんなら！」

「んじゃゝ弾いてみて」

と俺は、言った。

そして亮太郎は、それを弾いた。

まあまあ指は、動くようになっていた。

功もドラムがまあまあたたけるようになっていた。

やっぱり日曜に練習したかいがあった。

功と悠は、何かの曲を聞きながら練習して俺は、亮太郎にギターの

練習をさせてた。

するといきなり入り口のドアが開いた。

「あの・・・宮田君いますか？」

と松本さんが俺がいるか尋ねながら音楽室に入ってきた。

「俺ならいるけど・・・何？」

と俺は、ギターを背負ったまま言う

「入部したいんだけど・・・ダメ？」

と俺に聞いてくる。

「お、おおいけど・・・もうこっちメンバーそろっちゃってるよ？」

と俺は、言った。

やっべ！何か嬉しい・・・にやけそうになる・・・

「あ、それは、大丈夫、私も一応人集めてたから」

「皆入ってきて」

といきなり入り口から4人女の子が楽器を持って入ってきた。

「おおおお！！女だ！！！！」

と功は、嬉しいらしくドラムをバカみたいに叩き始めた。

「うざい」

と悠が功の頭をエルボして黙らせた。

「あの・・・1-3の中村篠です・・・楽器は、ベース・・・です・・・」

とビビってベースケースを盾にしながら名前を言った。

まゝ目の前で悠が功をしとめるところを見たからな・・・。

「私も1-3で森山美希って言います楽器は、ドラムだよん」

「そこの君この前ギター弾いてた子でしょ？あれかつこよかったよ」

と俺を指差しながら言う。

「えっと私は、唯と宮田君と同じクラスの石丸千早っていいいます」

「私は、楽器じゃなくてボーカルです」

とクールに石丸さんは、言った。

石丸千早・・・そんな人2組にいたっけ？。

んま・・・まだクラスの人の名前覚えてないしな・・・

「私は、1-1西山夏希です楽器は、キーボードです。」
と言う西山さん。

「キーボード？あのパソコンの？」

と功がバカ見たな事を言い出す。

「ちげ〜よバカ・・・」

と悠。

「ん〜功に分かりやすく言ったらピアノの小さいバージョンだね
と俺は、教えてあげた。

「で、私がギター」

「1-2松本唯だよ」

とニッコリ松本さんが笑った。

「よ、よろしく・・・」

と俺らは、言った。

「んじやくに入部届け俺にちょうだい」

「俺部長だし顧問の先生のところに持っていくから」

といったらすぐに女の子達は、入部届けを俺に持ってきた。

そして俺は、すぐに職員室にいつて顧問の志熊先生に持って言った。
それから音楽室で。

俺らも自己紹介した。

「ねえねえこれから軽音部の仲間だし男子は、もう下の名前で呼び
合ってるらしいからさ〜」

「女子も男子も下の名前で呼び合うことにしようよ!」

と森山さんが言う。

「え・・・いいの・・・?」

と亮太郎。

「いいよ別に」

と女子は、言うので俺らもこれからは、下の名前で呼ぶことにした。
それからちよっとしてからまた練習を再開した。

楽器歴を聴いた所

ギター1年、ベース2年、ドラム4年、キーボード10年らしい
だからほぼ初心者である唯は、俺がギターを教えてやることにした。
そして日が暮れたので帰ることに下

(7) 女子新入部員！(後書き)

女アアアアアアアアアアアア

(8) 強化合宿(前書き)

軽音部女子部員紹介!

1-1 西山夏希格好は、茶髪でまあまあ長いポニーテール 楽器キ

ーボード

1-2 松本唯格好は、茶髪で髪は、長い 楽器ギター

1-2 石丸千早格好は、黒髪で髪は、ショート 担当ボーカル)

クール)

1-3 中村篠格好は、金髪で髪は、長く後ろで束ねている 楽器ペ

ース(ビビリ)

1-3 森山美希格好は、茶髪で髪は、長く左右少しだけリボンで結んで

楽器 ドラム

(8) 強化合宿

俺は、部活で唯と亮太郎にギターを教えた。

そしたら千早が。

「ねえ私考えたんだけど私達もち曲ないわよねえ？」

と言う千早。

「ん？ま、まあな・・・まず曲作ろうとしてないからな・・・」

と俺は、笑いながら言った。

「たぶん実力が足りないからだと思うのよね」

「だから・・・私の家お寺だから広いし今度ゴールデンウィークにでも皆で強化合宿しない？」

と言う千早だった。

「え！？い、いいのか？何日泊まれるの？」

と悠がびつくりしながら言う。

「休みの最後までいいぞ」

と一言だけ言った。

そついう話をしてゴールデンウィークに千早の家で合宿する予定ができた。

それから日が進んでゴールデンウィーク。

夏希は、千早と中学の頃からの友達だったらしく千早の家に案内してくれた。

千早の家には、ドラムがあるらしく功は、ドラムを持ってこなくてすんだ。

そして門には、千早がいた。

それから練習場所と寝どころを案内された。

「男子バンドのボーカルって誰？」

と千早がいきなり言い出した。

「え、そりゃ〜優斗だろ」

と男子部員全員が言った。

「ハア!？」

と俺は、びつくりした。

「じゃ〜優斗は、付いてきて」

と、言われて千早について行った。

付いていくとお坊さんがいた。

「こ、こんにちわ・・・」

と一応挨拶しておいた。

「君が軽音部の男子ボーカルかい？」

と謎のお坊さんが聞く。

「あ、はい！」

「そうです」

と行きなり読経をやらされた。

それから1時間。

「う・・・あれなんだったの・・・」

と千早も一緒にやっていたが行き成りやらされた意味が分からなかった。

「あれは、だね〜一言で言うとな」

「ボーカルは、喉で歌うんじゃねえ腹で歌うんだ!ってことだな」

「あ、一応言っとくがわし千早の父だからの」

と千早の父が言った。

「えっと・・・喉で歌うんでは、なく腹で歌うとは、どっいう意味ですか？」

と、よく理解ができなかったので聞いた。

「ん?簡単に言ったらボーカルは、喉じゃなくて腹を使うからの」

「腹式呼吸ってやつだよ」

と千早父が簡単に教えてくれた。

「1日ずつ1時間増やすから楽しみにしとけと」

と千早父が言った。

「あ、はい・・・よろしくおねがいします・・・」

と俺は、言うて。

皆が練習してる部屋に行った。

「優斗！お前がさつき唯ちゃんと俺にくれた練習ファイルもっ半ペ
ージ弾けるようになったぞ！」

と嬉しそうに亮太郎は、言う。

「おお〜そっか〜それ全部弾けるようになったら指がもうガンガン
にぶ〜くよくなるぞー！」

「気付いてるかも知れないけどそれだんだん難しくなっているから
と俺は、そっいいながらギターを持って寝る部屋に行こうとする。

「あれ？どこ行くの？」

と篠が俺に聞く。

「ん？あ、俺今から作曲するから静かな部屋に行こうと思ってね。」
と行って俺は、寝部屋に行った。

それからずつと作曲して気付いたら3時間もたっていた。

曲は、一応できているのだがまだ半分しか言っていない。

俺ら男子チームは、初心者が多いから俺が難しいパートでかなりフ
ォローが必要だ。

と思いつながら少し休憩してまた作曲に集中した。

それから何時間かして食事の時間になったので飯を食た。

それから風呂に入ることになった。

男湯と女湯があった。

まるで温泉見たいでびっくりした。

俺は、髪を洗っていたら隣の女湯から……。

「きや〜篠胸大き〜」

コレ唯の声だな……。

「え〜唯ちゃんも大……お、大きいよ……」

コレ篠だな……。

「嘘だ！今胸見て小さいと思ったでしょー！！」

こいつら声でかいな……。

「唯は、普通サイズぐらいだからいいじゃないの〜」

「千早なんかお胸ないよ〜ほら〜」

この声は、・・・夏希だな。

「美希と私も普通サイズだね！」

と夏希の声・・・。

とちよつと聞いているとちよつと興奮してきた・・・。

俺は、声を聞きながら髪と体を洗い終わった。

そして湯に入っていると千早父が。

「もう我慢できん!!！」

「わしは、のぞく!!！」

と問題発言しだした。

「わしは、もともと親がお坊さんだったからお坊さんにされただけで仕事は、適当なんじゃ〜！」

とまたも問題発言をした。

「わしは、のぞくぞ〜」

と言い脚立を持ってきた。

どうやらマジらしい。

「おい!!皆止める!!！」

と聞いて俺は、必死にのぞきを止めようとする。

「お、お・・・わかった」

と悠と亮太郎が同時に言つて3人がかりで止めようとする。

「わしは、おっぱいが見たいんじゃ!!！」

「若さが欲しいんじゃ」

と、もう問題発言連発した。

「お坊さんが欲望丸出しでどうするんですか!!！」

と俺は、止めながら言った。

後から功が急いで体を洗い終わらせてこっちに走ってくる。

「ぬわあ!!！」

と功は、石けんですべつて俺らに突っ込んできた。

「ぬわああああああ!!！」

と俺らもすべつて女湯のフェンスぶち壊してしまった。

「キヤアアアアアアアアアアアア」

と軽音部女子全員

「ぬおおおおおおおおお！！！！」
と俺と功は、叫んだ。

なぜ叫んだかと言うと軽音部女子全員の裸を見てしまったからだ。

それから軽音部男子 + 欲望丸出し千早父は、ぼこぼこにされた。

ぼこぼこにされて体じゅうが痛かったので寝ることにした。

今日の強化合宿は、終わり。

(8) 強化合宿(後書き)

づぎの話は、強化合宿2日目のお話です。
お楽しみに！

(9) 強化合宿2日目(前書き)

こんばんわ大平光太郎です。

軽音部です！見てくれている方ありがとうございます。

(9) 強化合宿2日目

俺は、昨日欲望丸出しの千早父の、のぞきを止めようとしてまきぞいを食らいボコボコにされた。

その生で俺は、早く起きてしまった。

「う……いつて……」

と俺は、周りを見ると皆まだ寝ていた。

俺は、皆を起こさないようにギターを持って廊下で作曲をすることにした。

寝起きだからかスーっと頭の中に曲が浮かんできた。

俺は、その通りにギターを弾いてみた。

すると「おお〜優斗今の曲いいよ!!」

よ振り向いたら唯だった。

「あ……昨日は、ごめん……」

と昨日あやまったのだが一応またあやまった。

「まったくだよ……」

と昨日のことを思い出したらしく顔が赤くなる。

「でもあれ千早のおっさんがのぞきしようとするから止めてあんなつたんだよ……」

「コレだけは、信じて欲しい」

と俺は、言い訳を言った。

「それは、分かっているよ」

と千早が来た。

「いつも私が風呂に入ると除いてくるから分かっていたよ」

「だから私は、父以外手加減してボコボコにしたんだよ」

と言う千早。

手加減しても痛かったな……洗面器でぶつたたかれたし……

「じゃ〜私は、ちよつと朝の散歩してくるよ」

「お二人さん邪魔してすまないな」

と言って散歩に出かけた。

「ねえさっきの曲もう1回弾いてよ」

と唯は、言うからもう1回弾いた。

「やっぱいい曲だよこれ！」

「コレ名前でも付けた？」

と聞いてきた。

俺は、少し考えた。そして

「友達、曲名は、友達だよ」

と言った。

「曲しかできてないけどびったりだと思っよ！」

「頑張ってね」

と言って唯は、部屋に戻った。

俺は、昨日ボコボコにされた後男湯と女湯のさかいめである壁は、
どうなったのか気になって風呂に行った。

風呂に行くと昨日欲望丸出しでボコボコにされた千早父がいた。
どうやら壁を直してたらしい。

その後俺は、朝飯を食ってすぐに読経に引っ張られた。

1日1時間ずつ増やすと言われたのに3時間やらされた。

その後昼飯を食べて。

バンド練習をした。

「優斗！！全部弾けるようになったぞ！！」

と亮太郎が言う。

「はあ！？早すぎだろお前！！」

と俺は、びっくりした。

「いや、昨日ぼこぼこにされた後も俺練習の部屋で練習してたんだ
よ」

「全部引けるようになった後ミス率減らそうとずっとやってたし」

「もうかなり上達したと思っよ」

と亮太郎。

こいつ意外と努力家なんだな・・・。

「じゃ〜ちよつと待ってて」

「楽譜が書いてある本持つてくるから」

と言って俺は、楽譜を取りに行った。

俺は、楽譜とCDだけが入ったカバンを取り出した。

その中で亮太郎にぴつたり楽譜を選んで楽譜とCDを持って戻った。

「はい。じゃ〜この曲弾けるようにして」

「分からないところあったら俺に聞け教えてやるから」

と俺は、亮太郎に楽譜とCDを渡した。

亮太郎は、「わかった」と言ってCDで曲を聴きながら楽譜を見て練習をし始めた。

「優斗、お前が貸してくれた楽譜とCDありがとな」

「もうCDとあわせられるようになったから楽譜かえす」

とニツコリ笑いながら悠は、楽譜を返してきた。

「CDと合わせられるようになったんなら一緒にやってみるか？」

と俺は、一応聞いた。

「お〜いいぞ!!」

「やるうよ!! 1回優斗と一緒にやってみたかったんだよ」

と言う悠

「じゃ〜ちよつとまって美希! 1回曲聴いただけでドラム合わせれる?」

と俺は、美希に聞いた。

「ん? まあまああわせられるよ〜」

と俺は、すぐに曲を聞かせた。

「あ、コレならこの前練習してた曲だから叩けるよ」

と美希は、言ってドラムに付く。

「俺ちよつとアレンジ加えちゃってるけど気にすんなよ!! 後ボーカー俺がやる」

と言って俺らは、合わせてみた。

ベースとドラムの音がマッチしてかなりいいと俺は、思った。

周りは、どんな反応だ？と思い周りを見ると俺を見てポカーンとしている。

へたくソなのかな・・・と思いつつながら歌って曲が終わった。

「優斗・・・お前何者だ！！！」

「くそいい声してんじゃね〜かよ！！！」

と目の前で聴いてた功が言う・・・。

何か照れるな・・・。

そんなことより悠のベースがかなりうまくなっている。

「悠！お前うまくなったな！！コレだったらまあまあいけるかも知れんぞ！！！」

と俺は、悠をほめた。

「美希は、ドラムかなりうまいじゃん！！！」

「コレだったら女子バンドかなりすごいことなるかも知れんぞ！！！」
と美希もほめた。

「ありがと〜私もがんばるね〜」
と美希。

俺と悠は、まあ〜問題無いが後は、功と亮太郎だな・・・

亮太郎は、かなり頑張ってるし何より上達スピードが半端じゃないがまだまだだ。

功は、まだどの位上達したか知らない。

「功ドラム叩いてみて」

と俺は、功に言った。

「え！？な、何の曲？」

「今の曲？」
と功

「あ・・・できるんならこの曲でも・・・」
と俺。

「じゃ〜その曲で」

と美希と功が交代した。

その時美希が俺の横を通った時。

「この子、私よりうまいよ」
と小さい声で言った。

「よっしゃ〜!! やろうぜ優斗!! ついでだから悠もやるぞ〜」
と功がいった。

功が美希よりうまい? ドラムで? 嘘だろ・・・そう! 絶対嘘だな。
俺は、そう思った。

「よし! いいぞ」
と言い演奏しはじめた。

「ハア!?!」

俺は、思わずハア!?! と言ってしまった・・・。

声が出た理由は、功のドラムがすごい・・・。

何だこいつ・・・ぜっていい初心者じゃねぞこれ・・・。
演奏を終えた後俺は、。

「お前・・・本当に初心者か? クソうまいぞ・・・」

と俺は、かなり真顔で言った。

「レベル的に兄貴のちよつと下ぐらいのレベルじゃん!?!」

と俺は、言った。

「え? マジで? 俺本当に初心者だよ?」

「ま〜叩いたことがあるとしたら高校入るもつと前から友達の家で
毎日叩かせてもらったことある位だよ・・・」

と功。

「ハア!?! それ初心者って言わねえよ!?!」

と俺。

て事は、後は、亮太郎だけなのか・・・。

「ねえねえ皆で合わせるのってたのしいな!?!」

と、功が言う。

「うん! もつとやろう後3曲弾けるのあるからそれやろう!」

と悠が言って今演奏してた曲とそのほかの3曲合計4曲演奏を飯の
時間まで繰り返してやった。

今日は、ここまで

(9) 強化合宿2日目(後書き)

いよいよ男子部員のバンドがまともになりました。
次の話も楽しみにしてください。

(10) 強化合宿3日4日飛ばして最後の日！(前書き)

大平光太郎です！やっと十話までいきました。

呼んでくれた方ありがとうございます！><

今回の話は、強化合宿3日4日飛ばして最後の日です。

(10) 強化合宿3日4日飛ばして最後の日!

俺は、朝7時から昼飯までずっと読経をやらされた。

昼飯は、12時つまり5時間・・・きつかった・・・。

強化合宿3日目の時に俺は、かなり迫力のある曲をこいつらとやりたくて。

男子部員に楽譜を渡して全員に練習させた。

そして強化合宿最終日。

昼飯を食った後も皆は、練習していた。

功は、楽勝らしい。

悠は、できているのだがミス率が高い。

だから今悠は、ミス率を減らそうとしている。

そして亮太郎は、かなりミスが多いが、繰り返し演奏するたんびミス数が減ってきている。

だから一応だが問題は、ない。

女子チームも強化合宿3日目に曲が決まったらしく熱心に練習している。

そして夕方6時に男子チームと女子チームでどれくらい成長したか見せ合う事になっている。

「優斗もう1回頼む」

と亮太郎。

そして1時から3時まで亮太郎と合わせた。

その後は、悠と功と3時から5時まで合わせた

そして5時から皆で何回も合わせた。

俺は、ぶっ通しで歌ったら喉がつぶれてしまうので3回しか歌わなかった。

それと俺らは、休まずずっとやってたから指が何回も切れて何回もテーピングしてた。

「おい・・・優斗・・・大丈夫か？」

「お前ずつと俺らに付きつ切りで1回も休んでないだろ・・・」
と悠

「亮太郎を見る・・・こいつこの前までは、初心者だったのにこんな短期間でかなりギター弾けるようになってるだろうが・・・それは、それだけ見えない所で努力してたつてことだ・・・俺なんかよりも亮太郎の方が頑張ってる・・・だから俺は、大丈夫だ・・・」
俺は、そういつて「やるぞ・・・」と言った。

「もうお前は、休んでろよ!!」

「優斗が言うとおり、俺は、努力してたよ!!」

「でもお前は、この合宿で読経や俺らの練習につきそったりしてたから休む時間が一つも無かっただから休め!!」

「後は、俺らだけでも大丈夫だし頑張るから」

と亮太郎が言った。

「本当に大丈夫なんだな？」

そう俺は、聞いた。

「ああ信じる!!」

と悠が言った。

「分かったよ」

そう言つて。

俺は、ギターを置いて汗でベタベタになってたから。

1人で風呂に入った。

俺は、風呂で考えた。

あんだだけ読経をやらされたが俺は、何か変わったのだろうか俺は、考えていた。

そして数分経つたので風呂を出て新しい服に着替えた。

そして皆のところに戻る途中女子チームにあつた。

「おゝもう6時？」

と俺。

「うんそうだよそれより優斗なんで練習部屋いないの？」
と美希。

「あ、いや・・・俺1個も休んでないから皆が休んでるって言うから風呂は言ってた」

「といって俺らの練習部屋に行った。」

「どっちが最初に演奏する？」

と千早。

「女子チームからどうぞ」

と功がいった。

「じゃ〜私達から演奏するね〜」
と唯が言った。

女子チームの演奏は、かなり何かをうつたえるかのような感じだがなぜかずっと聴いておきたいと言う気持ちになってしまふ曲だった。

何よりボーカルである千早の声がかなりいい声をしていた。

「おお！！その曲良いね！！何かずっと聴いていたい！！ッて思っ
てしまふぐらいいい曲だったよ！」

と俺は、いった。

「ありがとう！」

「次は、男子チームの番だよ」

と千早がいった。

「お、おう！」

そう言っただ俺らは、配置に付いた。

「いいか？」

「いいぞ！！」

と皆が言った。

「じゃ〜行きます！！」

そう言っただ俺らは、演奏した。

！！さつき練習した時よりこいつらうまくなってるやがる・・・。

功も・・・悠も・・・亮太郎も・・・。

亮太郎は、ミスが多かったのに今のところミスが無い・・・。

コレなら・・・俺のサポート無くてもしける！！。

思う存分ど派手に弾きながら本気で歌える!!!
よっしゃいくぜい!!

そして俺は、思う存分ど派手に弾きながら本気で歌った。
そして演奏し終わった。

「お〜〜!!今の凄かったよ!」

「バンドの全員の息がぴつたりで」

「何より優斗の声がかなりいい!!」

「なんとというか・・・何かに包まれてるような・・・」

「一瞬でバンドの音楽とボーカルの声だけの世界みたいな・・・」

「あ〜〜一言でいえないや!!」

と夏希がいった。

「ありがとう」

俺は、そういった。

そしたら女子チームが。

「練習する」と一言だけ言って部屋を出て行った。

その後晩飯を食って。

風呂に入った。

俺らは、風呂で今日の反省会をしていた。

「今日のよかったよな!!」

「この強化合宿でかなり俺達上達したし」

と功。

「俺思っただけだよ〜このままずっと努力して行って力をつけて
いってプロ目指さないか?」

と亮太郎。

「プロか・・・いいな・・・親父も夢は、でっかい方が良
いって小さい頃いつてたしな」

と俺

「じゃ〜決まりな!!俺らは、力をつけてプロになる!!」

「いいな?」

と悠。

「ああいぞ」

と俺らは、言った。

と盛り上がったたら千早父が

「よいしょつと」と言つて脚立をおいた……。

「あれ？何してるんスカ！！！」

と悠。

「うるさい！！わしは、裸が見たいんだよ！！！」

と千早父。

「男らしくいつてんじゃねえよ！！！」

と功。

俺らは、またのぞきを止めようとした。

「あんたもこりねえな！！！」

と俺。

と俺らは、どうかのしようと考え女子の方に千早父がまたのぞきしようとしているのを伝えようと思いついた。

「おおおい！！！！！！！！皆！！！！またのぞきしようしてるから早く出て！！！」

と言つた。

「え！？わ、わかつた」

と女子達は、女湯を出たみたいだ。

どうにかのぞきをのぞく阻止した。

その後着替えて皆で帰つた。

(10) 強化合宿3日4日飛ばして最後の日! (後書き)

皆さん10巻まで読んでくれてありがとうございます!。軽音部です! 次の話も楽しみにしてください!。

(11) バンド名決定(前書き)

こんにちは、大平光太郎です。
今回の話は、6月の話です。

(11) バンド名決定

あの強化合宿からもう何週間かた。

そしてこの前、俺ら軽音部に部屋ができた。

もと軽音部が使ってたらしい旧部室棟の3号室4号室5号室の合計3部屋だった。

中は、意外と広くて4号室に入ると3号室5号室へ、いける扉がある。

3号室5号室には、前の軽音部の人が残したと思われるアンプやいろいろな機材が残されてあった。

軽音部全員で話し合って4号室は、休憩室、3号室は、女子バンド練習部屋、5号室は、男子バンド練習部屋と言う事になった。

3号室は、ドラムとアンプだけできれいなのだが5号室は、ドラムとアンプだけでは、なくいろいろごちゃごちゃして汚かった・・・。ク・・・じゃんけんで負けなければよかったのに・・・。

俺らは、しょうがなく掃除をしていたらあるものを見つけた。

何かと言うとベースだった。

見た感じ状態もよくアンプに繋いでも音が出る。

女子には、内緒にして悠がもらうことになった。

そして俺らは、5号室をきれいにしたのだった。

今男子バンドで練習している。

「亮太郎！！またミスったぞ！！」

と俺らは、今新しい曲を練習中。

曲のジャンルは、ハードロックだ。

今のところ演奏できる曲は、2曲そして今3曲目を練習していると言うことだ。

「あ、すまないー！！」

と亮太郎は言う。

「功もちよっと少し走ってんぞー！！」

と俺は、的確に言う。

「もう少しでギターソロ来るぞ！！優斗」と悠。

「分かってる！！」

と弾きながら言う。

「はい！ギターソロ！！」

と悠が言う。

ギターソロは、俺が少しアレンジしているからたまにミスをしてしまふ。

亮太郎は、まゝミスは、少ないのだがなかなかミスが減らない。

功は、ミスは、無いのだが調子に乗りすぎて走る……。

悠は、全然ミスが無い……。

「はい！勢いよく叩くぜええ」

と功が言った瞬間ドラムスティックが

バキ！！

と折れた。それ折れて切断された部分が俺に飛んできた。

「ギャアアアア！！！！」

「お、お前！！け、怪我させるきか！！」

と俺は、びつくりして言った。

「すまね……」

と功があやまる。

「功、これでスティック折れるの何本目だ？」

と悠が言う。

「え……つと……確か2本目だよ」

「あ、大丈夫！まだスティックの変え3セットあるから」と功。

「そろそろ休もう部屋来てからぶつ通しだし……」
と亮太郎。

「そつだな……じゃ……4号室行くか……」
と楽器を置いて4号室に行った。

「あ、女子バンドも休憩？」
と俺。

「ああそつだよ」
と千早。

「ねえ思っただけどさあ〜」
「ずっと私達男子バンドとか女子バンドとか言っって呼び合ってるよ
ね」

と唯が凄いことに気が付いた。

「あ」

と軽音部全員がそのことにきずいた。

「あ〜そつだね〜じゃ〜名前でも付けるか〜」
と悠。

「はい！！はい！！俺良いの思いついた！！」
と功が手を上げていう。

「ブラッディーボーイズ」
と功。

ネーミングセンスな！！。

「何で血まみれなんだよ！！」
と悠。

「じゃ〜1万円札拾っちゃった〜これ私のお小遣いに！！」
と夏希。

「名前じゃなくてただのセリフじゃん！！」
と俺。

「ホワイトキャッツどうかな？」
と篠。

「いいと思つよ」
「まとものが出ないしそれにしようよ」
と美希。

と言つ事で女子バンドは、ホワイトキャッツになった。

「後は、俺らのバンドだけだね・・・」

「ん〜大爆発!!」
と亮太郎。

「何でそうなんだよ!!」

「なんか全力で自爆しそうな名前やだよ!!」
と俺が言った。

そして俺は、ちよつと良いの無いか周りのものを見ていると。
俺のピックケースがあった。

ピックケース・・・

ピックの種類は、スモールピック、ティアドロップピック、おにぎり型ピック。

ん・・・

あ!!ティアドロップ!!ティアドロップよくな?

「ティアドロップ」

「ティアドロップどうかかな？」

と俺は、言ってみた。

「ティアドロップ・・・」

「おお!!いいじゃん!!」

「それにしようよ!!!!」

と功。

「俺も良いと思うよ」

と悠。

「うん、何かいいね」

と亮太郎。

「じゃ〜ティアドロップで」

と俺らのバンド名も決まった。

その後亮太郎が。

「はい、みんなにコレあげる」

ともらったのは、ピックのネックレス。

皆と絵は、同じなのだが1人1人色が違う

悠は、青色、亮太郎は、黄色、功は、白色。

そして俺は、赤色だった。

「ん？コレ何？」

と俺。

「こ、これは、……これは、俺らティアドロップと言うバンドの印……昨日作った。」

と亮太郎。

「お、お……ありがとう一生大事にするよ!!」
と俺。

「まゝそりゃ人からもらったものは、大事にするわな」と悠。

「うん、うん！コレは、できるだけ大事にするよ!!」
と功

「バンドで思い出したんだけど」

「さつき何でバンドの名前ティアドロップにしたん？」

と悠が疑問に思ったらしく聞いてきた。

「ん？あゝあれは、俺のピックケース見て俺の使ってるピック、ティアドロップピックだな」と思って

その名前にしたんだよ

と俺は、言った。

「おお!!このバンドの印にぴったりじゃん!!」

「ちょうどティアドロップピックだし」

と功。

「だっておにぎり型ピックだったらバランスが安定しないんだよ!

!」

と亮太郎。

そして俺らは、話している間に帰る時間になっていた。

(11) バンド名決定(後書き)

とうとうバンドの名前が決定しましたね
次回の軽音部ですの話をお楽しみに!!

(12) 俺らを見よ!! (前書き)

こんばんわ!! 大平光太郎です!!
いやゝ寒いですなゝ

(12) 俺らを見よ!!

この前、俺らのバンド名が決まった。

そして俺は、バンドの名前が決まってからライブに出たい!!みんなの前で演奏したいと言う気持ちになっちゃってしまい。

今ガンガンに練習している。

どれ位がんに練習しているかと言うと。

部活が終わったあと俺の兄貴の家で練習をするぐらいだ。

高校生になってから門限が10時までとなったから9時半まで練習している。

練習のし過ぎで俺の指も血まみれだ……。

土日は、泊りがけで練習している。

本当だったら4曲演奏できればいいのだが文化祭とかだとかなり曲を持っていないといけないのでいっぱい弾ける曲を増やしている。

今の所7曲できるジャンルは、ハードロックあとおふぎで1曲へビメタルを弾けるようにした。

そして今は、7月に入ろうとしているのにすっごく頑張っている。

今は、部室で練習をしている。

「亮太郎!!!もうちょっとギターを弾くスピード上げろ!!!」

と俺は、亮太郎に言う。

亮太郎も、俺ほどでは、ないがガンガンに弾けるようになった。

そして今練習している曲の演奏が終わった。

「ハア……ハア……喉……かわいたな……」

「飲み物買ってくるか……」

と俺。

「優斗いくんならおれらもいこうよ……」

「水分補給必要だし」

と悠が言うから皆で行くことにした。

俺は、1番に部室に出た。

「あ、宮田君。ちょうどいい時に出てきた」と、誰かと思つたら顧問の志熊先生だった。

「あ、こんちわ」

と俺は、挨拶した。

「あの、あなた達1年だから知らないかもしれないけど毎年ある行事で文化部成果発表会があるんだけど知ってた？」

「あ、一応言うつと3日後だよ」

と志熊先生が言った。

「え？知らないですけど・・・そんなのあるんですかと俺。」

「はい、あるんですよ・・・で軽音部も出ないといけないんだけど、大丈夫？」

と志熊先生。

「あ、はい大丈夫です！」

と俺は、言った。

「じゃ、皆に伝えてね」

と志熊先生は、そう言ってどっかにいった。

顧問なら部活動状況とか見にのぞいたりしろよ・・・

俺は、部員皆に行事のことを伝えてジューズを買いに行った。

その後俺らは、練習を再開した。

俺らは、3日後に備えて凄く練習した。

そしてあと1日の時は、練習のしすぎだから休むことになった。

そして当日。

俺は、朝起きたら今日が発表する日なのを思い出したら心臓がバツクバツクした。

俺は、昨日帰りに本屋で買った楽器の本を読みながら学校に行った。読んでいると凄いことが分かった。

部室で見つけた謎のベースの事だ。

あれは、10何万もするベースだったベースの名前は、リッケンバツカー。

あれいいベースだったとは・・・。
後で悠に言っておこう。

そして学校に付き
発表の時間となった。

最初の演奏は、ホワイトキャッツにしておいたからどれだけうまく
なったかわくわくしていた。

そして演奏が始まった。

俺は、やっぱ人は、成長する生き物だと思ってしまった。
なぜならその演奏は、合宿のときよりも凄くうまかった。

そして生徒達は、凄く盛り上がっている・・・。

ん・・・大丈夫か・・・ホワイトキャッツの俺らは、飲まれない
かな・・・

と思ってしまう・・・。

ちよつと気になり後ろを見る・・・。

あ・・・。

こいつら!!!ポカーンってなってやがる!!!。

「おい!!お前ら!!!」

「ホワイトキャッツに飲まれたら終わりだぞ!!!」

「今までの練習を思い出せ!!!」

「俺らは、たぶん女子よりも練習時間が多かった!!!」

「だから自信を持っていつもどおりいこう!!!」

と俺は、言った。

「そうだな!!俺らは、頑張った!!!」

と悠が言った。

そして俺らの番が来た。

俺らの演奏は、完璧だった。

でも、もしものときように用意してたエフェクターを使う事にした。
フツフツ!!エフェクターを使えば俺は、もっとすごいことなっ
ちやいぜく!!!!い

例えるならトカゲがゴジラになるかのように!!!。

さあ〜行くぜ!!!

として俺は、エフェクターを使ったのは、いいのだが・・・あれ？
やりすぎた？

生徒達がポカーンってなっちゃった・・・。

ちよつと心配だ・・・。

・・・亮太郎もポカーンってなりながら弾いてるし!!!。

こつち向くな!!!笑ってしまっただろ!!!歌ってるのに!!!。

そして俺らの演奏が終わった。

ちよつと間があいたがすごい拍手と歓声があった。

その後学校が終わってから俺らは、ファミレスで反省会をして帰った。

(12) 俺らを見よ!!(後書き)

ちょっと急ぎで書いてしまいました・・・。

(13) 運動 (前書き)

こんばんわ！大平光太郎です！！
最近ネタがへってきちゃいました・・・。

(13) 運動

衣替えが当分前にあつて今は、7月。今日から2週間クラスマッチがある。

何の競技があるかと言うとサッカー、バスケ、水泳、野球、陸上競技がある。

全種目2日ずつ行われる。

サッカーでは、純平が大活躍俺は、と言うと。キーパーをやらされていた。

70%の確立でボールを取っている。バスケでは、小学の頃兄貴がバスケ部だったのでよく付き合わされた。

「又ハハツハ!! 余裕だ人間どもよ!!!!」
と俺は、調子に乗りまくる。

「ユウトオオオオオ!!」
と功が叫びながらドロップキックしてきた。

「ピー!! ファール」
何反則してんだよ……。てかいてえな……。後でどつかで犬のウンコ拾って投げてやろう……。

水泳……。苦手だからいやだった……。しかもビリッケツだったし……。

クソ!! 皆泳ぎながらウンコもらしてたら馬鹿にできたのに!!。野球は、俺がピッチャーをやらされた。

よく純平と野球したっけな……。コントロールは、よかったけど毎回純平が撃った弾が……。

金玉か腹に入つて泣いてたな……。
「はっはっは!! 優斗!! 勝負だ!!」
と亮太郎だった。

ん……。こいつ強そうだな……。

ちよつと本気で真ん中投げてみるか……。

「うんどりゃああああ!!!」

と俺は、投げた。

「ふえ!?!」

と言つ掛け声でふ振る。

どんな掛け声だよ……ま……いつか……こいつアホだし。

そして亮太郎を三振した後他の生徒に打たれてチェンジした。

俺が1番最初だった。

ピッチャーの球は、遅かったので楽勝だたのだがゴロをうつてしまつた……。

すると。

「うおおおおお!!!」

と亮太郎がバットを持って俺が撃ったボールを撃ち返した。

俺は、びっくりして打ち返した。

「お前は、そんなものか又ハハツハ」

と亮太郎。

……何の競技だよ……。

そして最後の種目陸上競技。

俺は、一応中学の時の先輩にひばられて軽音部なのだが、たまに陸上部の練習に参加させられている。

まゝこの学校の陸上部ザコイから楽勝だな全員抜いたし。

最初の競技は、100m走。

学年生の中で1番早い生徒には、図書券500円分が10枚もらえる!!!。

だから俺は、100mを本気で走った。

そして決勝戦!!!

決勝戦で知ってる顔がいるか見たら純平と悠がいた。

そして位置に付いた。

結果は、俺が1位!!!

悠は、2位こそ早かつた……。

本気出してしまった……。

純平は、こけた。

へ、っダッセ!!!。

最後の競技は、クラス全員リレーだった。

俺は、アンカーに選ばれた。

リレーの最初が女子だった。

その次に女子が男子にバトンを渡して男子行った。

だんだん俺に近づいていく……。

それを考えるとしょんべんいきたくなる……。

そして俺の前が純平だから俺は、走る準備をした。

そして純平が走り出して俺は、走る位置に付いた。

「純平く〜ん!!!がんばって〜ライオンに追いかけられる時みたいに走って〜」

どんな時だ!!!ま……いつか……

いつもの事だし。

周りを見たら。悠と光太郎がいた。

「勝負だお前ら!!!」

と言って俺は、先にバトンをもらってゴールした。
クラスマッチの結果。

1位2組

2位3組

3位1組よぐだった。

その後クラスの皆で騒いだ。

この2週間疲れたので部活は、中止した。

(13) 運動 (後書き)

今回は、少しアニメのを参考にしました。

(14) 壊れた!! (前書き)

こんにちわ。

大平光太郎です。

軽音部です! 14話読んでください

(14) 壊れた!!

今日は、兄貴の家で練習をしていた。

俺らは、俺が作曲した「ボルケーノ」と言う曲を練習していた。

その曲のジャンルは、ハードロック今までの演奏してきた曲より激しい曲だ。

俺でもミスが多い。

「優斗!!今ミスっただろ!!」

と悠が言う。

確かに間違った。

ク・・・ごまかせないか・・・。

「俺のパートクソムずいからしょうがないだろ!!」

と俺。

「大丈夫だ!!俺は、いつも間違えている!!気にするな!!」

と亮太郎。

「気にするわ!!」

と俺。

そして9時半になったので帰ることにした。

俺は、兄貴の家にいったん戻って兄貴と一緒に車で帰るからギター

は、家においておいた。

そして「じゃ〜な」と俺らは、別れた。

俺は、いつも亮太郎と途中まで一緒に歩いてそれから兄貴の家に戻っている。

いつもどおり一緒に歩いてたら道に4人組の人がいた。

俺と亮太郎は、何も気にせず歩いていたら。

「君達葉桜高校の軽音部さん達だよね?」

と、その四人組の1人が言った。

「あ、そうですけど・・・何かようですか?」
と俺。

「君は、ギターボーカルの・・・」

「てことは、隣の人は、もう一人のギターリストの方ですよね？」
と謎の4人組みの1人が言った。

「あ、はい・・・」

「あなた誰ですか？」

と亮太郎。

「名乗るような者では、無いですよ」

と俺らに近づいてきていきなり亮太郎を殴った。

「なにすんだよ！！！」

と亮太郎。

「君達軽音部は、クソに等しいです」

「そのギターボーカルの方の足を引つ張ってます」
といつてきやがった。

そしてけんかが始まった。

制服をよく見たら隣の高校の生徒だった。

俺は、少しイラ付いた。

俺の仲間である亮太郎をバカにし殴ったからだ。

俺は、亮太郎を殴ったやつを壁にたたきつけた。

その後他のやつらも俺らを攻撃してくるのでどうにか亮太郎と攻撃
しまくった。

すると。

「は〜いこつち見て〜」

と亮太郎を最初に殴ったやつが亮太郎のギターを持っている。

「君のギターは、コウナルノガ相応しい！！」

と亮太郎のギターをぶっ壊した。

そしてそいつらは、逃げた。

「どうしょ・・・」

と亮太郎は、凄く泣きながら俺を見る。

「あ・・・亮太郎！！大丈夫だ！！」

「コレくらいなら修理に出したら直る！！」

と俺は、亮太郎を安心させようと言った。

「本当か・・・？」

と泣きながら言う。

「ああ！！本当だ！！！」

と俺は、言った。

そして亮太郎と別れた。

大丈夫かな・・・。

そして次の日俺は、部活で昨日の帰りのことを話した。

「嘘だろ！？」

「じゃ・・・今亮太郎ギターないって事じゃん！！」

と功が言う。

「本当だ・・・だから今から亮太郎と修理に出してくる」

と言って俺と亮太郎は、修理に出しに行った。

亮太郎は、昨日家でこの事を話したらしく、お金は、もらっていた。

修理代は、足りたのだが3ヶ月かかるらしい。

つまり10月になってしまう。

その間どうすれば・・・。

俺のギターもあるが・・・全部高いしな・・・。

と思いつながら俺は、。

「俺の親父とか兄貴にとかギター貸してくれないか聞いてみるよ」

と俺は、亮太郎に言った。

そして俺は、家に帰った。

俺は、兄貴や親父に聞いてみた。

「父さんののは、ギターの3本しか持ってないし、全部70万以上の

オーダーメイドだから無理だな・・・」

と親父。

「俺のバンドの奴に聞いてみるよ」

と兄貴。

「ありがとう兄貴、頼むよ」

と言って俺は、2階に上がった。

そして俺は、どうすれば良いかずっと音楽を聴きながらベットで寝ながら考えてた。

(14) 壊れた!! (後書き)

今日は、ここまでです。

読んでくれた方。ありがとうございます

(15) ギター (前書き)

こんにちわ!

大平光太郎です。

(15) ギター

俺は、昨日亮太郎のギターが修理に出てる間どうすれば良いか考えた。

その結果皆でバイトをしようと言うことを思いついた。

そして俺は、部活の時その話をした。

「おお!! いいじゃん!! やろうよ!!」

と功が1番に賛成してくれた。

と言うことで俺らは、俺らは、バイトをすることになった。

俺と悠は、ファミレスでバイト。

功と亮太郎は、本屋でバイトになった。

少し心配だ・・・。

それから少し日がたち待ちに待った給料がもらえた。

そして皆で部室に集まり皆で合わせてみると、まゝギターは、買えるのだが良いギターは、買えない。

「くそ!!!!」

「金たまんねえじゃねえか!!」

と功。

「うつせえ!!!!それが普通だああ!!」

と俺が怒鳴る。

そして功と喧嘩になりそうになったその時。

「うつせええええ!!」

と悠が功に怒鳴った。

「ご、ごめんなさい・・・」

あまり怒鳴らない悠が怒鳴ったからびびってしまった。

その後もバイトを増やして金をためた。

日がたち俺らは、また集まり今どれくらい集まったか確かめた。

「おお!! もういいの買えるんじゃないか?」

と亮太郎。

「そつだな！」

「じゃ〜今から買いに行くか？」

と俺が皆に聞いたその時。

「あの・・・軽音部の部室ってここでいいですか？」

と見知らぬ女性と男性2人組みが俺ら部室の扉を開けて尋ねてきた。

「あ、はい・・・軽音部の部室は、ここですが・・・」
と俺。

「あ、私達、元軽音部の中山と石田です」

「軽音部が再結成したって聞いていました」

と中山さんが言った。

「はあ・・・」

と俺ら。

「え〜っと私達、軽音部が再結成したって事で後輩達にできるだけいい演奏をしてほしいため、元軽音部の仲間達とお金をためて楽器を買ったんです」

「受け取ってもらえますか？」

と言う。

「あ、はい！！喜んで！！」

と悠。

よっしゃ〜女子達は、まだ練習中だ！！女子には、黙っておこう。

「まずは、ギブソンのレスポールを」

と石田さん。

「えー！！ギブソンのレスポール！？」

と俺は、驚いた。

「はい、元軽音部の方々に集まって買いました。」

と中山さん

すげ・・・。

「あと、ギブソンのSGモデルをコレは、一番高かったので大事にしてくださいね」

と中山さん。

「ベースの方は、5号室にあつた僕のベースを、一応10万するやつなんで」

と石田さん。

「あ、あれってそんなにするんだ・・・」

「ありがとうございます」

と悠。

悠にその事言うの忘れてた・・・。

「あ、僕達のためにこんな事して下さって」

「本当にありがとうございます!!」

と俺。

「いいよ、いいよ」

中山さんが笑つて言った。

「僕、近くのライブハウスで働いてるからたまに遊びにおいで」

と石田さんがメールアドレスを教えてくれた。

その後俺らは、このギターをもらい俺と亮太郎でどっちをもらうか決めてた。

「どっちにする?俺的には、亮太郎SG使いなれてるからSGがいいと思うんだよね」

「俺は、いろんな種類のギター持つてるけど大体レスポールだし」

と俺は、亮太郎に一番高いと言つていた、SGを勧める。

「いいのか?俺が高額のギター使っちゃって」

と本当になんか悪いなゝって感じの顔しながら俺に言った。

「いいよ、俺昔からギブソンのレスポール欲しかったし」

と言つて俺がギブソンのレスポール。

亮太郎がギブソンのSG。

と言つ事になった。

その後俺らは、もうギターがあるのでこのお金どうしようかと話し合つて、エフェクターや楽譜を買う事にした。

「今日ギターショップ行く?」

と悠が嬉しそうにリッケンバックカーを綺麗にふきながら言う。

10万する奴だから嬉しいのだろう。

ま、俺もギブソンのレスポールがもらえたから嬉しいけど。

「ん〜今日じゃなくていいや〜」

と功が言ったから行くのをやめた。

その後女子が3号室から出てきた。

「お〜今日は、バイト行かないの？」

と美希がドラムスティックでペン回しをしながら言った。

「あ、もうギター買ったから」

「もうバイトおわり」

「今からバイトをやめる電話する」

と言って俺らは、嘘をついた+バイトをやめた。

俺は、ちよつと喉が渴いたからジュースを買いに行くことにした。

俺は、自販機のところに行ってコーラを買って自販機の横で飲んだら。

「優斗〜やつと見つけた・・・」

と、誰かと思つたら兄貴のバンドのギターカズヤ兄ちゃんだった。

「お〜カズヤ兄ちゃん！」

「どうしたの？こんなところで」

と俺は、コーラを飲みきつて言った。

「連から聞いたぞ〜お前の部員の奴、知らない奴に絡まれてギター壊されたんだって？」

「そう聞いたからあげるつもりでギター持ってきてやつたんだよ」

とカズヤ兄ちゃんがギターを俺に渡して帰った。

さつきやつと見つけたって言ってたな・・・。

・・・絶対学校をさ迷ってたんだな・・・カズヤ兄ちゃん・・・。

その後部屋に戻りながらどんなギターか気になってギターケースを開いてのぞいてみた。

木の色でピックガード黒のテレキャスターだった。

・・・思ってたんだけど・・・もうギターあるな・・・亮太郎・・・

ま・・・二本目って事でいつか。

俺は、亮太郎にギターを渡して久しぶりにバンド練習をすることになった。

久しぶりの練習だから皆下手になったんじゃないかと思ったら、全然前と変わらない。

逆に俺と亮太郎が凄く高いギターを使っているから前よりよくなっている。

そして俺らは、久しぶりの練習だったので今まで演奏していた曲全部をずっと日が暮れるまで演奏して帰った。

(15) ギター (後書き)

おわった。

15話を読んでくださってありがとうございます。

(16) 申し込み(前書き)

こんにちわ。

大平光太郎です！

(16) 申し込み

1学期が終わり、そして今は、夏休み初日!。

俺は、部活をするため今この暑い中学校に向かっている。

「あじい……………」

「あじい……………」

「コンビニによる……………」

俺は、暑いから学校の近くのコンビニによることにした。

俺は、コンビニに入るとっ凄く涼しくてあ……………もうコンビニ出たくない……………。

と思っってしまった。

俺は、コンビニでジュースとアイスを買おうとまずジュースの所に行くところ悠がいた。

「おお!悠もコンビニに避難か?」

と俺は、悠を見つけて言った。

「ん?おお!!優斗」

「お前も避難?」

とジュースを取って悠は、言った。

「あ、うん」

と俺は、言っでジュースとアイス取った。

その後買っですぐに学校まで走った。

一昨日部室の4号室に最新のエアコンが付いた。

3号室5号室には、古いエアコンが最初から付いている。

だから俺らは、部室までずっと走った。

「っ、付いた……………」

「あじい……………早く部室はいるぞ……………」

と俺と悠は、部室に入る。

部室に入ると先に千早と亮太郎と篠がいたから部室が凄く涼しい。その後少し休んで皆そろってすぐに練習を始めた。

その途中亮太郎が。

「な〜皆〜もうこんなにくまくなっただんだけ何かライブハウスでライブしたくねえ？」

と亮太郎がいきなり言い出した。

「ん、ん〜ま〜な・・・」

「じゃ・・・今週の日曜日近くのリブハウスでライブするか？金払わないといけないけど」

と俺は、ちよつと心配だが聞いてみた。

「おお！！それいいな！！しよっぜ！！って金払わないといけないの！？」

と亮太郎が言い日曜日にライブすることにした。

「じゃ〜女子達にもライブ出ないか聞いてみようよ」

と俺らは、女子にも聞いた。

女子チーム、ホワイトキャッツも出ることになり、夕方、皆でライブハウスに行くことにした。

それまでは、練習のだがまず、ライブハウスで演奏する曲を決めることにした。

「4曲しか演奏できないから」

「俺的に最初の曲は、インパクトがある曲で最後は、落ち着いた曲がいいと思うぞ」

と俺がいたら1曲目が俺作のボルケーノになった。

確かにあれは、インパクトある！。

その後残り3曲も決まった。

その後俺らは、その曲の順番で演奏してみた。

全然問題ないのだが、まだボルケーノで何回かミスが出る。

つまり、ボルケーノ未完成だからやばい・・・。

なので、ボルケーノをずっと練習してした。

そして、夕方になって、皆で近くのリブハウスに向かった。

「お〜ここ！！ここ！！」

とライブハウスに入る。

「お！君達〜」

と石田さんがいた。

「あ、こんにちわ〜」

「ライブしたいんですけど・・・」

と言ったらすぐに申し込み用紙を出してくれた。

そして俺らは、申し込み用紙を書いて石田さんに渡した。

「え〜っと今週の日曜日の・・・バンド名がホワイトキャッツか〜」

「良いバンド名だね！」

「で、こっちも今週の日曜日で、バンド名がティアドロップか〜」

「お〜かつこいいね〜」

と俺らのバンド名をほめてくれた。

そして申し込みを終えて俺らは、かえった。

(16) 申し込み(後書き)

OK !!

(17) ライフの前(前書き)

こんばんわ!

大平光太郎です!

(17) ライブの前

俺ら軽音部は、この前近くのライブハウスで日曜にライブを申し込んだ。

で、今は、日曜日。

ライブハウス集合時間は、1時半。

俺は、30分前行動する人間だから1時にライブハウスにいた。ライブハウスに行く。

「おお！優斗何してんの？」

「まさか俺らのライブ見に来たのか？」

と、誰かと思っただら兄貴だった。

「うわ！兄貴！」

「って……ちげえよ俺ら軽音部もでるの！！」

「ホラ！」

と、俺は、ギターを出した。

「お！そっか！頑張れよ！」

と兄貴は、ソファアに座った。

「優斗！今日何のギター持ってきたの？」

とカズヤ兄ちゃんがきょうみしんしん。

「ん？あゝギブソンのレスポール」

と俺は、ケースから出した。

「うそ〜！？」

と兄貴のバンド皆がびっくりした。

「いや……本当」

と俺は、何でそんな豪華なギターを持っているかを話した。そして後からずらずらと他のバンドの人達が来た。

皆も1時半ぴつたりに来た。

「お〜〜ど、ど、どどうしよう〜〜」

「き、緊張して落ち着かない」

と亮太郎。

「大丈夫か？亮太郎・・・」

「まゝそう言う時は、手のひらに人じゃなくてうつ病の「鬱」って漢字で書いて飲むといいぞ！」

「いい具合に落ちこんで最終的には、落ち着くぞ！自殺はかろうとするかも知れんけど・・・」

と俺は、冗談で言う。

「おお！！そつか！！ありがとう！！」

と亮太郎は、手に鬱って書こうとする

「うつ・・・うつ・・・」

「鬱かけない・・・ってか鬱ってどう書くんだっけ・・・」

と亮太郎がいかにもヘルプ！！って感じの顔で俺を見る・・・。

「お前テンパリすぎ・・・ってかお前鬱書けね〜のかよ！！」

「じゃ・・・落ちつかね〜と顔ボコるぞ・・・」

と俺は、おどした。

「は！！っへ落ち着いてるに決まってるじゃないか〜」

「さあ〜行こうじゃないか〜」

と亮太郎は、ビビリ出した。

その後何組バンド来てんのか調べたところ7組来ていた。

俺は、一応兄貴のバンドに加わってたことがあるから一応ライブは、なれている。

俺は、いろんなバンドが来ているな〜と思いつつながら見ていたら、当分前に亮太郎のギターを壊した奴がいた。

俺は、あの時のが許せなくてそいつの後ろに行った。

「おい」

とギターを壊した奴がこっちを向いて俺は、殴った。

周りは、びっくりしてた。

「お前よ！！よくもこの前仲間のギター壊してくれたな！！」

と俺は、押し倒した。

「お前！よくも俺の仲間の事をクソって言うてくれたな！！」

「4対2で真つ暗な夜に襲つてきやがつて!!」

「ふざけんじゃねえぞ!!」

と俺は、そいつの腹を殴りまくった。

「おい!優斗!!」

と兄貴と石田さんと功と悠が俺を止めた。

「離してくれ!!そいつは、亮太郎のギターを壊した奴なんだ!!」

「ボコボコにしねええときがすまねえ!!」

と俺は、もがく。

「ツフ下手くそなのにみんなの前で演奏してるカスのギターを折る」

「そののどが悪い!!」

「へ、こんな奴らかまつてられるか」

とそいつは、ギターを持って俺らから離れようとする。

その時。

「おい」

と亮太郎がそいつのむなぐらをつかむ。

「お前よ・・・」

「ギター持つてるって事は、ギターリストか？」

と亮太郎は、凄く切れている。

「そうですが何か」

とそいつは、ちよつと目をそらす。

「お前よ・・・ギターリストならギターがどんだけ大切かわかん
る？」

「お前もギター壊されたらいやだろ？」

「今まで練習してきた相棒を壊されたらいやだろ!!!!」

「そんな事ギターリストがやっちゃいけねんだよ!!クソが!!」

「それによ・・・」

「下手?カス?ハア?それが何だよ!」

「お前だつて最初は、ギター下手だつたんだろ?!!」

「そしてうまくなるうと練習してきたんだろ?」

「俺だつて下手だよ!カスだよ!」

「でも、俺だつてうまくなろうと練習している」
「わからないがこれからギター弾くのうまくなるかも知れない」
「お前と同じなんだよボケ〜!!」
「それと俺の仲間に次カスとか言ったらゆるさねえからな!!」
と亮太郎は、むなぐらを離し一発殴った。
そして、こいつは、俺らから離れた。

(17) ライブの前(後書き)

OK!!

読んでくださってありがとうございます

(18) 初ライブ！(前書き)

こんばんわ！

大平光太郎です。

(18) 初ライブ!

俺らは、ギター壊した奴らが離れた後、俺らティアドロップは、話し合った。

「あいつ、たぶんギター弾くのがうまくなったから下手だった頃の自分忘れてしまってるのかも知れないよ」

「だからさあ」

「思い出させてやろうよ」

「俺らだつて下手だった、けど今は、かなりうまくなっている」

「うまくなるうと練習して、ここまで成長したんだ!つてよ」

「・・・今のせりふちよつとかっこよくねえ?。」

「いい事俺言つたんじゃねえ?俺サイコ!。」

「俺らがどれだけ成長したか見せればあいつも下手だった頃の事もいだすだろうよ」

「まゝ簡単に言つたらあいつをスンマセンでしたゝつて言わせてやろう!。」

と言つて俺らは、リハーサルをする。

リハーサルであいつのバンド名が分かった。

バンド名は、カラス。

バンドの順番で言つと2番目ホワイトキャッツ3番目兄貴のバンド6番目ティアドロップ7番目カラスだ。

そしてリハーサルが終わつて楽屋に行く。

ライブ開始まで30分ある。

少し喉が渴いたから外の自動販売機でコーヒーを買つた。

「・・・?優斗くん?」

と誰かが俺の名前を呼んだので声がした方向を向く。

「宮田優斗君だよねえ!。」

と誰かと思つたら、昔3年生の冬に告白して俺をふつた人だった。名前は、中本利子、確か振られた時のせりふが。

「ごめん！私、隣の中学のに、好きな人いるから・・・」

「その人バンド組んでて凄くカッコいいんだよね」

「だからごめん！」

と言う振られ方だったな・・・。

思い出したら何か涙出てきそうになってきた・・・。

「優斗くんどうしたの？」

「目が真っ赤だよ？大丈夫？」

と利子ちゃんは、俺を心配している。

「だ、大丈夫・・・」

「ちよつと寝不足で目が真っ赤なだけ・・・」
もちろん嘘だ。

「へ〜で、何で優斗くんここにいるの？」

「ライブ観に来たの？」

と利子ちゃん。

「いや・・・俺・・・ライブに出る・・・」

と俺は、まだ涙が出そうなので出ないように踏ん張りながら言う。

「え〜！バンド始めたんだ〜すごい」

「じゃ〜優斗くんのライブ観れるね〜」

「がんばってね」

と利子ちゃんは、ライブハウスの入り口の列に並んだ。

その後ライブが始まった。

2番目のホワイトキャッツのライブが始まった。

ホワイトキャッツの演奏は、久しぶりに聴いた。

いや〜いつ聴いても早は、いい声してんな〜。

その後は、兄貴のバンドバウンティーハンター！

ん〜兄貴達のバンド演奏は、すごいな〜いつ見てもライブハウスに
いる皆が盛り上がる。

俺らもこんなふうになるかな・・・。

そして色んなバンドの演奏が終わって、俺らのバンド。

「皆！そろそろだぞ！」

と俺が言ってみんな準備をする。

見た感じ皆落ち着いているようだ。

そしてステージに向かう。

「さあ！楽しもう！！俺たちティアドロップの初ライブだ！」

と言いつつステージに立った。

俺らは、セッティングをしている間いろいろ客の声を聞いていた。

「ティアドロップ？しってるか？」

とか

「ティアドロップ？知らないな〜始めて何じゃないの？」

とか

「ん〜見ものだな！」

俺は、1番にセッティングが終わり、ちょっと肩ならしに弾く。

そしてちゃんとセッティングできているから前側のお客さん達を見

る。

その中に兄貴達と軽音部女子がいた。

・・・あ・・・なんか燃えてきた！！。

こいつらまだセッティング終わらないのか！！。

俺は、早く演奏したくなつたので皆のを手伝う。

そしてセッティングが終わると、目の前に利子ちゃんがいた。

う・・・ま〜いい！俺を振ったこと後悔させてやる！！。

そして俺らは、1曲目ボルケーノを演奏した。

俺らは、もうボルケーノを完成させたからすごい曲になっている。

ボルケーノを完成させて録音して皆で聴いたがすごい曲にできあが

っていた。

それは、まさに鋼の一撃と言つていいほど。

俺は、いつもより声を出して歌った。

そしてボルケーノを演奏しきり周りの客を見ると皆、圧倒されてポ

カーンとなっている。

・・・！？兄貴達もポカーンなてるし！！！！。

え！？下手だったかな・・・

と思った瞬間。「ウオオオオオオオオオオオオ」

といきなり盛り上がった。

その後も演奏して最後の曲……。

この曲も聴いたが落ち着いた曲なのに急に爆発しような良い感じにできあがっていた。

その後カラスの演奏は、やけになって演奏してるような感じに見えた。

「ねえ優斗君！」

「凄かったよ！！」

「なんか振ったのがまちがいだっただな〜って思っちゃった」

「でさあ〜付き合ってたって言ったらダメだろうから、メール友達になっってくれないかな？」

と言う利子ちゃん

俺は、黙ってメールアドレスを交換し合った。

そしてライブが終わってライブハウスの出口に出ると。

「ティアドロップさん！！お疲れさまですー！」

と8人組の知らない人が俺らに言う。

「私達！今日出てたバンティーハンターって言うバンドのファンの人間です！」

「でも、今日、ティアドロップさん達の演奏を聴いて、ティアドロップさん達のファンになりました！」

と俺らにファンができた。

「あ、ありがとう……」

と一応言っただけ帰ろうとしたその時。

「待ってください！！！」

と誰かと思ったら亮太郎のギターを壊した奴だった。

「あの……演奏聴きました、よかったです」

「それであの……下手だった頃の自分を思い出しました」

「それに人は、成長すると言う事も思い知らされました」

「だから……あの……すみませんでした」

と頭を下げる。

そしていきなりギターケースからギターを出した。
そしてギターを自分で壊した。

「これで・・・相子って事で・・・」

と、頭をまた下げる。

「もう良いよ」

「頭・・・上げてくれ」

「それと・・・これで相子だから・・・許す」

「あと・・・友達にならないか？」

と亮太郎。

「え？友達？良いんですか!？」

とそいつは、びっくりしながらこっちを見る。

「あゝいいよ」

「俺は、1年佐藤亮太郎よろしくな!」

と亮太郎は、笑った。

「僕は、1年千葉楓よ、よろしく」

と俺達は、新しい友達が出来た。

(18) 初ライブ! (後書き)

OK

見てくれてありがとうございます! !

(19) 師匠!! (前書き)

優斗の兄のバンド、バウンティーハンターのメンバー紹介

宮田連 格好茶髪で髪がちよつと長い 楽器ドラム (優斗の兄)

中島和也 格好黒髪テンパ 楽器ギター&ボーカル

村岡優 格好茶髪で短髪 楽器ギター

川村亮平 格好茶髪ロング 楽器ベース

俺らは、あの初ライブ日に少しだけ成長した。
それから3日後。

俺らは、いつもどおりにバンド練習をしていた。

「うおっしやくー!!ギター弾きながら頭振ってたら気持ち悪くなっ
ていたぜえええ!!」

「グハハハハ!!う・・・ちょ、は、はいてくる・・・」

と亮太郎は、5号室から出た。

「・・・さつきからブンブン頭振って・・・気持ち悪くなるまでや
るか・・・」

「・・・アホだな!うんっ絶対アホだ!」

「じゃくちよつと休もつか!」

「9時からやつてるし疲れただろ」

と言って俺は、ギターをスタンドに立てた。

「あ、うん・・・あ、今何時!?!」

と悠がベースをスタンドに立てながら言う。

「え?今?今は、・・・10時58分だね」

「後2分で11時」

とケータイの時計を見て俺は、言う。

「え・・・もうそんな時間か・・・はえくな・・・」

「あ、飯どうする?」

「またラーメン行く?」

と悠がカバンから財布を取り出す。

「ラーメンか・・・」

「もう2日連続ラーメンだしな・・・」

「今日は、お好み焼きにしない?」

と言いながら俺も財布を出す。

「お好み焼き・・・良いじゃん・・・行くつよ・・・」

「う・・・まだ気持ち悪い・・・」

と亮太郎が戻ってきた。

そして俺らは、お好み焼きを食うことに決まりお好み焼きやさんに向かった。

そして校門を出るとあの初ライブで友達となった千葉楓がいた。

ちなみにこいつのバンドンの名前は、カラス。

「やゝ君達ゝ遊びに来たよ」

とカラスのみんなも連れてきていた。

「あ、俺ら今から飯食いに行くんだけど・・・」

「付いて来る？」

と俺は、扇子で扇ぐ。

「行くよ!!!」

「その前に楽器を置かせてくれないかい？」

と楓が言うので楽器を置きに行きそしてお好み焼きの店に行った。

お好み焼きを食べてる途中。

メールが来たのでケータイを開く。

メールの相手は、俺のギターの師匠だった。

俺のギターの師匠は、元は親父なのだが、俺の上達が早すぎたらしく5年生の冬には、親父の

昔からの親友らしいギターリストにギターを教えてもらっていた。

最近は、もうガンガンに弾けるから一緒にいろいろなバンドの曲を弾いている。

その人からメールが来た。

メールの内容は、「優斗ゝ連から聞いたぞゝお前この前ライブしたらしいじゃん。」

「それに軽音部作ってもう2組もバンドいるんだって？」

「と言う訳で俺の家に来い！」

と書いてある。

と言う訳でって・・・どう言う訳ですか・・・師匠・・・。

ま・・・いいか・・・。

「ねえ今俺のギターの師匠から家に来てってメールあったんだけど・・・」

「行くか？できればカラスの皆も」

と俺は、言った。

「おお！優斗のギターの師匠の家！！」

「行くに決まってるだろ！！」

「お前みたいな化け物ギターリストの師匠だぞ！？」

「行かないって言ったたら1万円を捨ててるのと同じようなもんだぞ！？」

「もつたいないから行くに決まってるだろ！！」

と悠が言う。

化け物ギターリストって・・・。

「僕達も行きますよ」

「なぜなら友達のお誘いを断る理由も無いしね」

と言うので飯を食って俺らは、部室に戻った。

女子達も誘って俺達は、師匠の家に行った。

「おゝ優斗きたな」

「この子達が優斗が作った軽音部の部員か？」

と師匠が家の外にいた。

「あ、はい」

「あ、なんとなく友達のバンドも連れて来ちゃいました」

と言うって俺言った。

「あ、ちよつと持ってきてくれな」

「俺達のバンドの奴らも呼んだから」

「たぶん仲間がライブハウスで練習できるようにしてるから」と言う。

確かベースの人が何かのお偉いさんだったよな・・・。

そして連絡が来たらしく練習をできるようにしたライブハウスへ向かった。

ライブハウスについて俺達は、自己紹介をして、1バンド1曲ずつ

演奏し合った。

俺らは、ジャンケンに負けて最後。

そして俺らので番が来て一番自信があるボルケーノにした。

この前ちよつと曲をいじってもつと迫力があるかつこよくて良い曲にした。

だから自信がある！。

そして演奏をする！。

「おお〜！！皆うまいね〜！！でも優斗〜まだ本気で弾いていないだろ！」

「ちゃんとほんきださんと〜」

と師匠に言われた・・・。

・・・ク・・・本気で弾いてるフリしてたが・・・バレタ・・・。

「ま〜いいか〜じゃ〜俺達も演奏するか〜」

と言いつ師匠たちは、配置に付く。

そして演奏が始まって俺達は、圧倒的な差を見せ付けられた。

師匠たちは、昔いろいろな音楽会社から誘われていたと言っていたが、ここまですごい差を見せられて

俺達は、うまいと思っていたけどまた下手だと見せ付けられた。

それから俺達は、悔しくてずっと練習をした。

手が自分の血で染まるぐらいまで・・・。

それだけ悔しかったのだ。

(19) 師匠!!(後書き)

いつも読んでくれたあざっす!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8725z/>

軽音部です！

2012年1月15日03時45分発行